

Y-NAC通信

1998.1.1. No.6+7

田代海岸シーカヤック…2
屋久島でマンタを確認…4
マジマクロイシモチ…5
消え行くヤクシマヤギ…6

コスタリカ…7
台湾原生林エコツアー…8
台湾の巨木…13
安房川カヌー体験会…14

屋久島の紹介…15
サラワク研修記…16
屋久島ウゾウムゾウ
カレンダー・文献…22



再び縄文杉について

屋久島野外活動総合センター

小原 比呂志

創立以来、Y-NACは縄文杉には背中を向けて活動してきた。過剰利用が問題になる場所でエコツアーというのはいかかなものか、コースが長すぎて自然を楽しむ余裕が無い、伐採跡が多いし線路歩きは不快だ。これらの建前は、よく縄文杉を単に否定しているように誤解されることがあるのだが、そうではない。正直言って、まだ縄文杉縄文杉言ってるの？という感じだ。あるいは言い方が悪いけれども、マスコミなどが流し続ける縄文杉のイメージにすっかり洗脳されてしまった、大勢の信者を何とか救出したいという、いらんおせっかい的な発想も、まあ少々。

一方、内部の方針として、あえて縄文杉をはずしてやってみる、という実験的な戦略があった。縄文杉がシンボルとして威力を発揮すればするほど、それは旧来の「観光」というチャンネル（これには企業も官公庁も、島民さえも含まれると思う）に巨大な広告塔として取り込まれ、イメージとして消費され、そこから開放されることは難しくなる。ストリートにそこに係わっていると、縄文杉の影響下から逃れられなくなる。逆に、縄文杉をはずした形で自然ガイド業を成立させることができれば、従来とは質の違う経営基盤を確保したことになる、縄文杉がどっちに転んでも影響は受けずにすむ。

とまあ、少々突っ張りながら、岩の上にも四年。いろいろな可能性が現実のものになり、この仕事はこの方向でいいんだ、という確信はおおむね揺るぎないものとなった。縄文杉が有ろうと無かろうと屋久島の自然の魅力にはほとんど影響はない。新たな展開として、ボルネオや台湾など、定点としての屋久島から発想された海外のエコツアーも生まれはじめている。

ところで、ここに来て島内でもいろいろ変化がおきている。

優秀な同業者が少しずつ増えていることは何より心強い。しかし一方ではガイドがらみの不祥事やトラブルやらの話もないではない。日本では、ガイドという仕事には「資格」が存在しない。したがってよくいえば実力勝負だが、看板を掲げれば誰でもガイド、ということでもある。少なくとも島内のガイド業者の連絡会議のようなものが必要だ、という話になるだろう。

また、縄文杉に登山道を新設したいという話が再び持ち上がった。屋久島の歴史的登山道群の整備すら充分に行われていない状態でこれが現実的なアイデアだとは思えないが、もし計画が動き出すようなことがあれば、これは屋久島の登山利用構造もガイド登山の状況も一変させてしまう可能性があり、Y-NACとしても傍観しているわけにはいかなくなる。ガイド業者のほとんどが、縄文杉を中心に動く現在、「老舗」のY-NACも、なんらかのかたちで縄文杉や屋久島のガイド業界全体に係わらなくてはならない時が遠からず来るといことだろうか。

YNNACC特選

コースガイド

⑥ 田代海岸～早崎 「シーカヤック」



屋久島は、東側が持ち上がり、西側に傾きながら隆起しているといわれている。このため東部の海岸にもっとも顕著な海岸段丘が現れる。今回は、段丘面に滝や洞窟が目白押し。超オスメスポットとして屋久島東海岸（田代海岸～早崎）をご紹介します。

概況

田代海岸から早崎にかけては、高さ300～400mの断崖が続く。屋久島でも最もダイナミックな地域の一つである。人を寄せ付けない断崖には、大小幾つもの滝や洞窟があり、無数の離れ瀨を抜け、巨大な岩橋をくぐる、種子島を眺めながらのカヤッキングは、シーカヤックの上からH2Oジェットノ打ち上げを眺めるなんておしゃやれなこともできるのだ。またこのエリアは地質的にも面白い地域で、枕状溶岩やタングステン鉱脈に伴う鉱山跡等を見ることが出来る。

この早崎付近は、非常に流れが速いので、砂地の浅瀬となっているため、うねりが高くなりやすいので、瀬端で遊ぶのであれば、べた凧の日をお勧めしたい。

① エントランスポイント

天然記念物枕状溶岩の碑のあるところで、車を降りる。海に向かって右手に小さな入り江があり、砂地になっているのでここから艇

を出そう。入り江の正面は瀬波が立つが、出口にある大きな枕状溶岩の右側の水路は、いつでも静かで、少々条件が悪くても出入艇可能である。但し水路を抜けたところに、隠れ岩があるので、干潮時は注意が必要だ。帰りはこの水路を見つけないといけないので、枕状溶岩をよく覚えておこう。

② 枕状溶岩

屋久島は巨大な花崗岩の島で、火山ではない。従ってこの枕状溶岩は、屋久島で生成したものではない。枕状溶岩は、その形状から海底火山の噴火で生成したと言われている。暗赤紫色をした枕状溶岩の断面を見ると、いくつもの枕が積み重なったように見える。出の悪い給の具のチューブをぎゅゅと絞っているとお尻の方が破けてプチッと給の具がはみ出してきた経験を思い出して欲しい。海底の低温・高水圧の条件の中で、表面の冷えて固まった溶岩を突き破るようにはみ出したマグマが、次々と急激に冷やされ、ちよと枕が積み重なったように固まっていく。枕状溶岩ができたのである。

そこではこの枕状溶岩は、いったいどこからどのようにしてやってきたのだろうか？じつはこの溶岩、生まれは遠く赤道あたりの海底火山と言われている。それがフィリピン海プレートと呼ばれる海洋プレートの動きに乗って運ばれてきて、プレートが屋久島

の南東に連なる南西諸島海溝で地殻内部に沈み込む際に、大陸側のユーラシアプレートに押し付けられて、屋久島の海岸部を取り巻く堆積岩の層（四十層群）に付加されたと考えられている。遠大な旅の終着点が屋久島だったということである。

③ 田代浜のハマユウ

田代海岸の南側は、延長500mほどの砂浜となっている。この浜には日本一ともいわれるハマユウの大群落があり、6月下旬から7月にかけてお花畑となる。

④ 大崩壊地

7、8年前に大崩壊した。左下に小さな洞窟があるが、崩壊した岩石が洞窟の中に打ち上げられて埋もれてきている。

⑤ 入り江の滝

人を寄せ付けな静かな入り江の右奥に、断崖を垂直に落ちる美しい滝がある。知床を彷彿とさせるこの



ルート随一の滝である。入り江の左側は、これまた千尋の滝を彷彿とさせるような、堆積岩の巨大なスラブ（一枚岩）となっている。かつてこの入り江の入り口の大きさに山羊が悠然と座っていたのを見たことがあるが、やつらはこの断崖をどうやって降りてきたのだろうか？

⑥ 洞窟群

断崖の下に幾つもの巨大な洞窟が開いている。残念ながら上陸するのが難しく、未だ未調査である。このあたりの洞窟から、コウモリが飛び立



つという話を聞いたことがある。⑦ 巨大な岩橋 海にせり出した巨岩にひょうたん型の穴がぽっかりと開いて高さ20mほどの巨大な岩橋となっている。屋久島唯一といわれているこの岩橋を是非ともくぐってみたいと

ころだ。但し干潮時は干上がったしまいくくれないので、潮を見計らって挑戦して欲しい。うねりがあるときにも、瀬波が出て近づけない。ここから早崎までが、いよいよ核心部である。

⑧ 離れ瀨

離れ瀨の間を縫うように進むと次々と洞窟が口を開けている。べた凧の満潮時ならば、このうちいくつかに入れそう。

⑨ 大洞窟

小さな入り江の奥に大洞窟が口を開けている。入り江の左側には滝のように水が流れ落ち、垂れ下がったシダがホルネオの洞窟を思いつくさせる。未調査なのでどのくらい深いかはわからない。

⑩ 赤岩の窪

海に赤さびたような白い岩が突き出ていて、エントランスポイントあたりからでも早崎方面にひときわ白い岩が海に向かって突き出ているのがよくわかる。地元で赤岩と呼ばれるこの岩は、四十層の堆積岩を貫く石英斑岩の岩脈で、非常に硬いために屋久島の

荒波にも侵食されずに、海に突き出している。

この石英斑岩の岩脈が一個所途切れており、そこが直径10m足らずの真ん丸入り江となっている。不思議な笑窪のような空間である。一度に何艇も入ると身動きできなくなるので交代で入ってみよう。

⑪ 落ノ川上陸ポイント

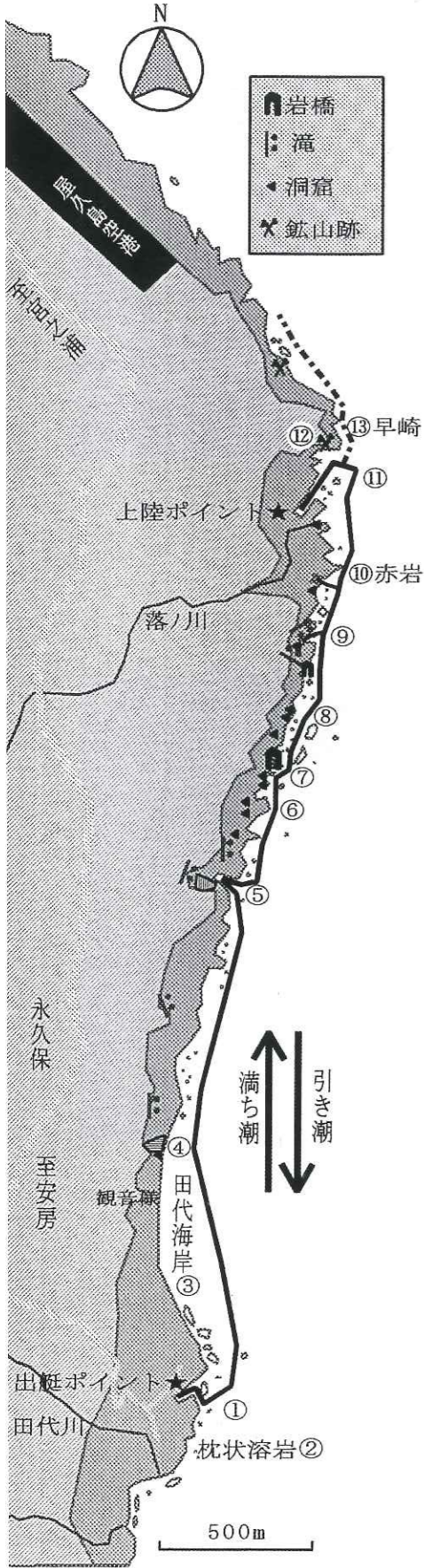
落ノ川の河口は、樋状の水路となっており、海上からは見えない。沖合いから見ると岸辺の離れ瀨に瀬波が立っている。上陸困難に見えるが、早崎側から回り込むと、奥に砂地の細い入り江があり上陸可能だ。

⑫ 早崎

早崎周辺は、屋久島の山岳部を形成する花崗岩の本体からは少し離れているが、このあたりの地下浅所にその分派の花崗岩の貫入があるらしく、著しく変成を受けており、タングステンの鉱脈が露出している。

⑬ 早崎

屋久島の東端の岬である。断崖に見事な地層が見られる。とんでもない断崖なのだが、縄はじがけてあり、釣師は降りてくるらしい。あらためて釣りにかける情熱に驚かされることろだ。この早崎は非常に流れが速く、また岬をまわると風当たりが変わるので、岬をまわるときには注意が必要だ。むやみにまわると、戻れなくなるから御用心。



1992年「屋久島沿岸海洋生物学術調査報告書」(屋久島沿岸海洋生物調査団 編)で屋久島産魚種リストを発表したが、その後新たに確認したものが出てきているため、YNACでは再編の準備を進めている。

その中で、横須賀市自然博物館の林公義氏よりテンジクダイ科の魚種はもっと未確認のものがあるはずとの指摘を受けた。日本産テンジクダイ科魚類は15属86種が知られているが、屋久島産魚種リストではわずか10種のみとなっている。そこで、今年1年をテンジクダイ科の魚種を中心に再調査を行うことにした。

今回は、その中でマジマクロイシモチ(*Siphamia majimai*)を採取することに成功したので、ここに報告する。

1997年5月15日、元浦でダイビング中、水深3mの岩場のガンガゼに共生するテンジクダイ科ヒカリイシモチ属の魚類でペアと思われる2個体発見した。ダイビング後、「日本産魚類大図鑑」(東海大出版会)で同定をしたところ、マジマクロイシモチ(*Siphamia majimai*)であることが分かった。分布は奄美大島・西表島となっており、記載に「極めて稀種」とあった。

5月17日、写真を撮るために再度潜ってみると1個体のみとなっていた。写真のみ撮るが個体が小さく体色が真っ黒のためうまく撮影でなかった。

5月20日、採取するため再度現場へ行く。ほぼ同じ場所にやはり1個体があった。サンプリングをし、もう1個体を探したが見つか

らなかった。サンプリングした個体は、写真を撮り、ホルマリンで固定した。(YNAC標本 apo-1 Si maj)

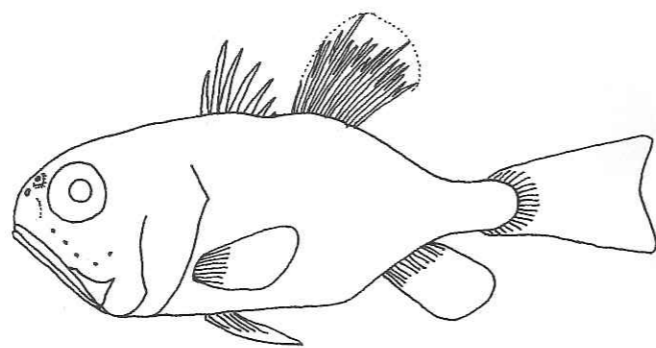
6月23日、ダイビング中水深3m、前回より20m程南よりの岩場でガンガゼの刺の中にもう1匹のマジマクロイシモチを発見。

6月26日、23日に確認した時と同じ位置にいるのを発見、撮影・採取に成功。サンプリングした個体は、写真を撮り、ホルマリンで固定する。(YNAC標本 apo-2 Si maj)

6月27日、サンプリングした個体を測定した。

表. マジマクロイシモチ測定値

	apo-1	apo-2
全長	32.85	31.85
体長	27.15	24.95
体高	10.01	
頭長	11.05	11.80
吻長	2.85	3.20
眼径	3.25	3.20



マジマクロイシモチ(*Siphamia majimai*)

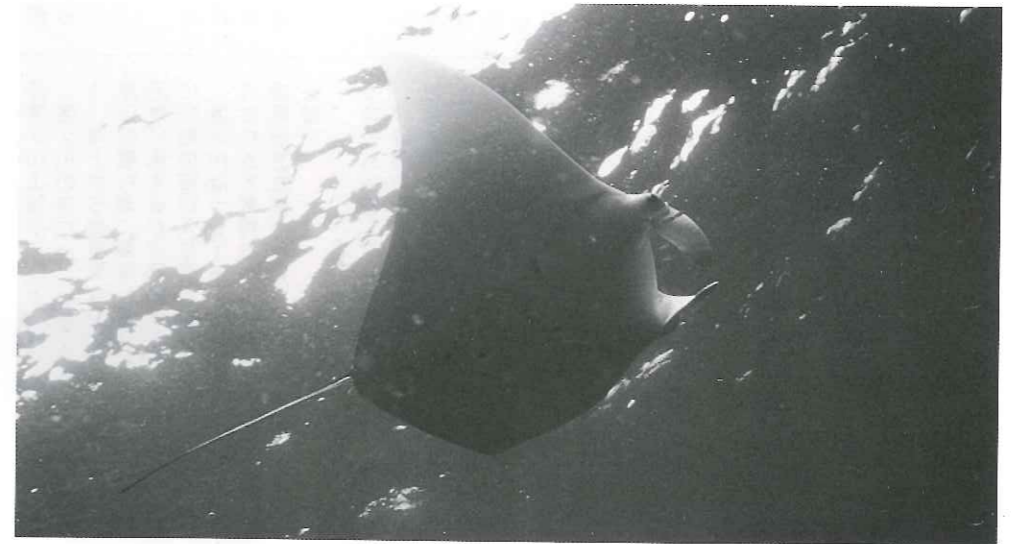
測定結果より、サンプルapo-1は雌で腹部が膨らみ肛門より卵が露出していた。apo-2は雄で体はapo-1より小さいが口径は少し大きかった。口中保育を行うためと思われる。明らかにペアであると思われる。最初に見たときはペアで一つのガンガゼにいたが、5月17日時点で別々になっていた。ヒカリイシモチ属の魚類は発光バクテリアを共生した発光器を持っている。夜間観察をしていないので発光するところは観察できなかった。

林氏にマジマクロイシモチについて問い合わせたところ、「ヒカリイシモチ(*Siphamia versicolor*)より個体数は少ないが、四国あたりでも確認されている。分布域はヒカリイシモチより少し北よって温帯域に分布が偏っている可能性がある。」との事だった。今後、テンジクダイ科の魚類についてさらに調査を勧めていきたい。



ガンガゼのトゲの間を住み家にするマジマクロイシモチ

屋久島でマンタを確認!



栗生に出現したマンタ

1997年1月2日、福岡在住の石坂 環さんが屋久島・栗生塚崎でダイビング中にマンタ(オニトマキエイ)に遭遇し写真撮影に成功。その写真を送ってくれました。屋久島では、釣り人がマンタがジャンプするのを見たという話は聞いていましたが、それがマンタであったかどうかは確認できませんでした。実際、屋久島近海で見た大型のエイは、マダラトビエイ(体長1m)、マダラエイ(体長1.2m)

などですが、マンタはいままで確認できませんでした。この報告と写真はマンタの確かな記録として貴重な報告となりました。

石坂さんは、年に2~3回やって来て、栗生青少年旅行村でキャンプを張りながら栗生の海を撮り続けている人です。いつもあまりゆっくり話をする機会もないので、1度ゆっくり屋久島の海について語り合いたいものです。(松本)

大窪 勝美

私がヤクシマヤギの存在を知ったのは、昨年七月十日(十四日)の五日間、憧れの屋久島で心の底から遊んで帰ってきた後、重傷の「屋久島シンドローム」に感染してしまった私に、富山出身で現在富良野に在住している友人が「屋久島へ行ったのならヤクシマヤギを見たか?」と聞かれたのが始まりだった。

私は「えっ?」思いつつ、それでも屋久島にカブれてしまった頭で一心に考え、自信を持って「屋久島にヤギはいない! いるのはヤクザルとヤクシカなのだ」と言ったのだが、友人は「以前、富山の農業試験場の中にあるミニ動物園にヤクシマヤギが飼育されていて、そやつはスコイ(健康)の持ち主で、柵を飛び越えて大変だったのだ」と、やけに具体的に言った。そこでY.N.A.C.の市川さんに聞いたところ「屋久島にヤクシマヤギはいないが、上野動物園にはいるよ」と解った。ヤクシマヤギなのにナゼ屋久島にはいないのだ?ととても不思議に思い、私なりに調べてみる事にしたのだ。

私の調べ方は書物を調べたりというのではなく、思い付くまま電話をかける、情報を集めるという方法だ。その結果、次の事が解った。
・まずヤクシマヤギはトカラヤギと同じもので、産地名を付して呼ばれ、沖縄ヤギも同種である。ただし少し疑問が残るので、調べは続行中とのこと
・北海道酪農学園大 植崎先生
・北は北海道の帯広動物園から始まり、日本全国10ヶ所ほどの動物園で飼育されている(北海道札幌市田山動物園)

・身体は普通のヤギの半分くらいで、メスは更に小さい。色は黒に近い(げ茶(徳島動物園)井口さん)や、白地に(げ茶や茶色の斑点があるものもいるよ)だ。

(酪農学園大 植崎先生)
・主に食用用であるが、小型であるため肉が少ない。が、フィリピンにならないという最大の特徴がある(琉球大 大島先生)
・屋久島では大型の食用用ヤギであるサーネン種と交配し、肉が大量に取れて、フィリピンに強い品種を創るうとしたが失敗、また流通も上手くゆかなかった。そして四、五年前、沖縄の業者が大量に買い付けに来たために屋久島のヤギはいなくなってしまう。(酪農学園大 学 アサカワ先生)

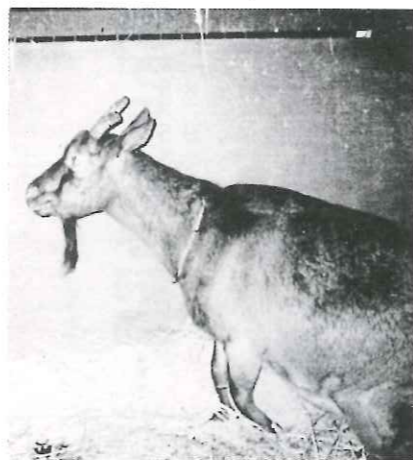
屋久島にヤクシマヤギがいなくなってしまうのはこういう経緯だったのだ。
・その後沖縄では沖縄ヤギと同じように、同種と見られているヤクシマヤギでも大型ヤギとの交配が成功し、大型でフィリピンに強い食用用ヤギが大半になってしまい、ヤクシマヤギはもろちん沖縄ヤギもその数は数えるほどになってしまったということだ(琉球大 大島先生)

ヤクシマヤギは人知れずだが人の手でその数を減らしている。同じ動物で野生動物が絶滅の危機に瀕している場合は大きく取り上げられるが、私たちの生活に密着している家畜が人間の利用頻度だけでその姿を消そうとしているのだ。一方珍しい動物を人々に見せようとする動物園でヤクシマヤギを繁殖し日本中に広げて純血種を残そうとしているのがとても興味深い。だが徳島動物園では近親交配が進み小ささが特徴であるはずのヤクシマヤギはだんだんと大きくなってしまっているのだ。その手によって完全にコントロールされる

の数を減らし続けて、近い将来一頭もいなくなってしまうのではないかと思ったり複雑な思いがするのである。
おしまし。

第五号でヤクシマヤギ WANTEDと書いたところ、北海道の大窪さんから次々と新事実、資料が送られてきました。あんまり面白かったので、今回は特別にお願いしてレポートを書いていただきました。どうもありがとうございます。
ところで送られてきた資料の中に、世界家畜図鑑のヤギのページがありました。これによるとヤクシマヤギ(トカラヤギ)は東南アジアの島嶼型のヤギだとされています。東南アジアの島嶼といえは我々の馴染が深いボルネオではありませんか。

今年2月に訪れたサラワク州のジャングルでは、ピナン族という狩猟民族と出会いました。彼らの連れていた犬が、なんとヤクシマヤギの血を引く我が家の愛犬ゆめちゃんそっくりなのです。ヤクシマヤギとヤクシマヤギは、多くの南方文化を引き連れて、遠くボルネオから屋久島にやってきたのだ。…なんて壮大な文化のつながりを夢想している今日この頃です。(市川)



ヤクシマヤギ

ボルネオ サラワクエコツアー 開催のお知らせ

問い合わせ先: 有隣堂生涯学習部 土橋珠美
Tel: 045-825-5539

バコ国立公園
海とマングローブ域とジャングルがセットになった国立公園。熱帯雨林の様子を探りながら、テングザル、カニクイザル、シルバーリーフモンキーなど、マングローブ域に集まるリル達や、樹冠に集まる鮮やかな熱帯の鳥など、興奮のアニマルウォッチングがお勧め。

グワン・ムル国立公園
はるか上空で枝を広げる高さ60m級のフタバガキ科の木が立ち並び、熱帯性の着生植物がその高木を巻き覆う。熱帯雨林はゴージャスだ。さらに、この目玉は巨大洞窟群。例えば、幅60m、高さ120mという巨大洞窟。夕方には、何十万匹のコウモリが飛び出して行く。自然が生きてきた時空のスケールに圧倒されるボルネオ。驚異とワクワクの「ジャングル探検」で、熱帯雨林の奥へ奥へと。

熱帯雨林ボルネオを往く

旅行主催: 東洋航空船
運輸大臣登録旅行業第371号
旅行取扱: トリップ・ナンバールワン 神田店

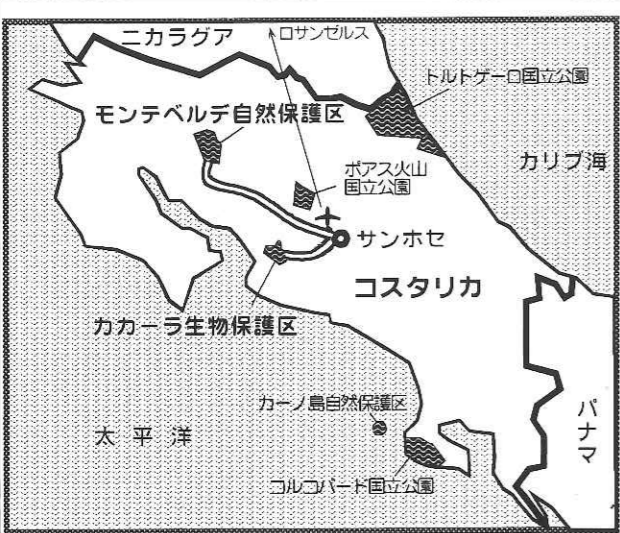
- 開催日時: 10年2月21日(出)-28日(出) 7泊8日
- 参 考: ボルネオ島サラワク州(マレーシア/成田空港集合・解散)
- 参加費: 259,000円(7泊(うち1泊はキャンプ)・21食代・国際線航空代・現地国内航空代・現地交通費・全乗物参加代含む)
○ 講師と現地ガイド、当社担当者が同行。
○ お申込時に予約金3万円、残金は1月20日迄にご入金下さい。
- 定 員: 18人(最少催行8人)
- 講 師: 屋久島野外活動総合センター・市川 聡

頻りに海に洗んだアマゾンの森や、砂漠の影響を受けるアフリカの森と比べ、ボルネオの熱帯雨林は、数千万年、着々と進化を続けてきた。遺伝子プール・地球の酸素供給源としても貴重な熱帯雨林。この森を定評あるエコツアー・ガイドの解説で、実感をもって捉えてみたい。

熱帯雨林を訪ねて「コスタリカ」

伊藤ふき代

「コスタリカってどこ?」という人がほとんどである。知っている人がいても、「コロンビアの産地でしょ」というくらいだ。なぜコスタリカにいったのか?という問いには「屋久島にいったことがきっかけなのだろう。中米の熱帯雨林を見たくなったのだ。私のライフス



今回参加したツアーは日本野鳥の会主催のネイチャーツアーであったため、参加者は全員ヘナランのバードウォッチャー。シロウトは私と岡田だけで、かっ一番若かった。五〇代の女性と、リタイヤしたご夫婦がほとんど。といつも全員で十一人。講師の京極さんは野鳥の会から参加していたが、本来はサルの研究者だそうだ。

成田から「A. 経由でサンホセ着。そのあと現地ガイドのセルジオ氏と合流。彼は大学で鳥の研究をしていたそう。非常にブライドの高い、優秀なガイドだ。マイクロバスに乗り、モンテベルデ自然保護区へ向かう。コスタリカはエコツアーの先進国だけあって国立公園はもろちんたくさんあるが、もっと民間レベル、例えばその地域の小学校や中学校で管理している公園や保護区があるのである。

サンホセあたりは、静岡の裾野市を思い出させるような地形である。この国も火山国であり、地震国のせいだろうか。山が富士山に似ていた。このあたりではカラスのかわりにコンドルが

私達の頭上を飛んでいる。思わず「コンドルが飛んで行く」を口ずかすも、電柱にはエアプランントがコムのようにならざがっている。
モンテベルデは熱帯雲霧林であり、いつも雲に隠れていて全貌は見えない。年間降雨量が非常に多いところは屋久島に似ている。雨が降っているわけではないのに、非常に局地的に霧雨が降ってくるのだ。標高は一六〇〇メートルくらい。少し肌寒い。木の名前はよくわからないが、ヘゴや着性ラン、ペゴニアなどの種類が見られた。もっと植物のことも質問したかったのだが、なにぶんバードウォッチングの旅のため、鳥中心になってしまったのが残念だ。

コスタリカで見た鳥はみんな美しい色をしていた。ティズニラランドの「魅惑の子キルム」(ティズニラランドではあまり人気がない)そのままの鳥が本当にいいのだ。ケツァール、ニシヨクキムネオオハシ、インコ、ハチドリなどとにかく種類が多い。彼らの美しい羽の色は森の中では、保護色になるのだそうだ。

動物も動物園の外の方が数が多いというだけあってすぐに見ることが出来る。ホエザル、ミツユビナマケモノ、ハナグマ、キンカジュ、イグアナを見る。本当に間近にいるので驚く。ハキリアリの巣も観察した。このアリは巣の中でキノコを繁殖させてエサにしているらしい。そのせいか巣をさわると暖かいのである。
海岸付近の低地にある熱帯林カララ生物保護区は、蒸し暑いゆるゆるジャングルだ。板根のある大木や高木が多く、ストリチア

(極楽鳥花)がたくさん生えていた。ここには「コンゴウインコ」が見られた。大型の鳥で、鳴き声が大変大きい。「ジャングル大帝」に出てくるインコに似ている。アリアカシアという木は刺の部分にアリを飼っていて、葉を食べる虫から木を守っているのだ。カララにいく途中の海岸ではゴンカンドリとカツシヨクヘリカンを見た。ゴンカンドリはガラバコスから飛んでくるということだ。

移動に時間がかかることさえ除けば食事も日本人向きだし、英語もわりと通じるし、道路などの整備はまだよくないけどホテルもよかつた。日本食レストランやオヤオハンもある。観光収入をあげてにしている割には、物売りはしつこくないし、物価は安い。アメリカとヨーロッパの観光客が多く、治安も思ったより悪くないみたい。ダイビングによいところもたくさんあるそう。今回は少し予習をして、もう一度訪れてみたい。二月には、市川氏が講師のボルネオツアーに参加する予定。こちらも楽しみだ。

名古屋の伊藤ふき代さんに、「コスタリカのエコツアーについて綴って頂きました。とても哺乳類との遭遇率が段違いに凄いですね。熱帯雨林もなかなか鮮やかな分厚さ。何よりも膨大なソフトの蓄積が底力となって、さまざまなお面からエコツアー先進国コスタリカを支えているのは間違いないようです。僕も行ってみたい。(小原)

台湾で原生林エコツアーを楽しんだ

屋久島の温帯針葉樹林、つまりヤクスギの森にもっともよく似た森として現れてきたのが台湾のヒノキの原生林であった。台湾大学の謝教授のご厚意によって実現した台湾原生林エコツアーの試みを紹介する。

台北へ

台湾の森が凄そうなのはわかった。しかし台湾の森を見る、といっても九州と同じくらい広い島のなか、六日の日程でどこをどう見たらいいのだろうか。

国内ではなかなか情報収集もままならなかったが、いくつか手がかった候補地のなかから、最終的に選ばれたのは、
①拉拉山のヒノキ巨木林と台湾ブナ群落。
②鞍馬山の照葉樹林の原生林。
③東西横貫公路。標高差三四〇〇メートルの植生垂直分布。

この3箇所だった。謝先生にご相談するうちに、拉拉山は、アプローチの林道が、台風による崩壊で通行止めになっていることが分かり、代わりに棲蘭に近い「鷲鷹湖自然保護区」がいいということ、これを差し替えることにした。

台北の中正国際空港には、謝老師（中国では先生のことをこう呼ぶ）

ご本人が迎えに来てくださり、恐縮。しかも台湾大の植物学研究室についてみると、先生の四駆で院生の趙君と張君が案内してくれるという、願ってもない段取りができていくのだ。台大近くの「南天書局」が理系の書籍専門店、ここで資料収集。夕方、鹿兒島の湿潤林シンポジウムで謝老師と一緒に清澄な頼さんも顔を出してくれた。教室の全学生と共に素晴らしい台湾料理をご馳走になったあと、我々は、趙君の運転で幸せに台中へ向かったのだ。

鷲鷹の照葉樹林・鞍馬山

東アジア随一といわれる、台中の国立自然科学博物館（生態学関係もいろいろ、古代中国の科学技術がすごい。）をじっくり見学したあと、まず向かったのは、台中の東に位置する鞍馬山の森である。鞍馬山は、台湾第二の高峰、雪山から西に延びる大きな尾根の末端にある支峰で、一

帯は、森林遊楽区（日本の自然休養林のようなもの）に指定されている。

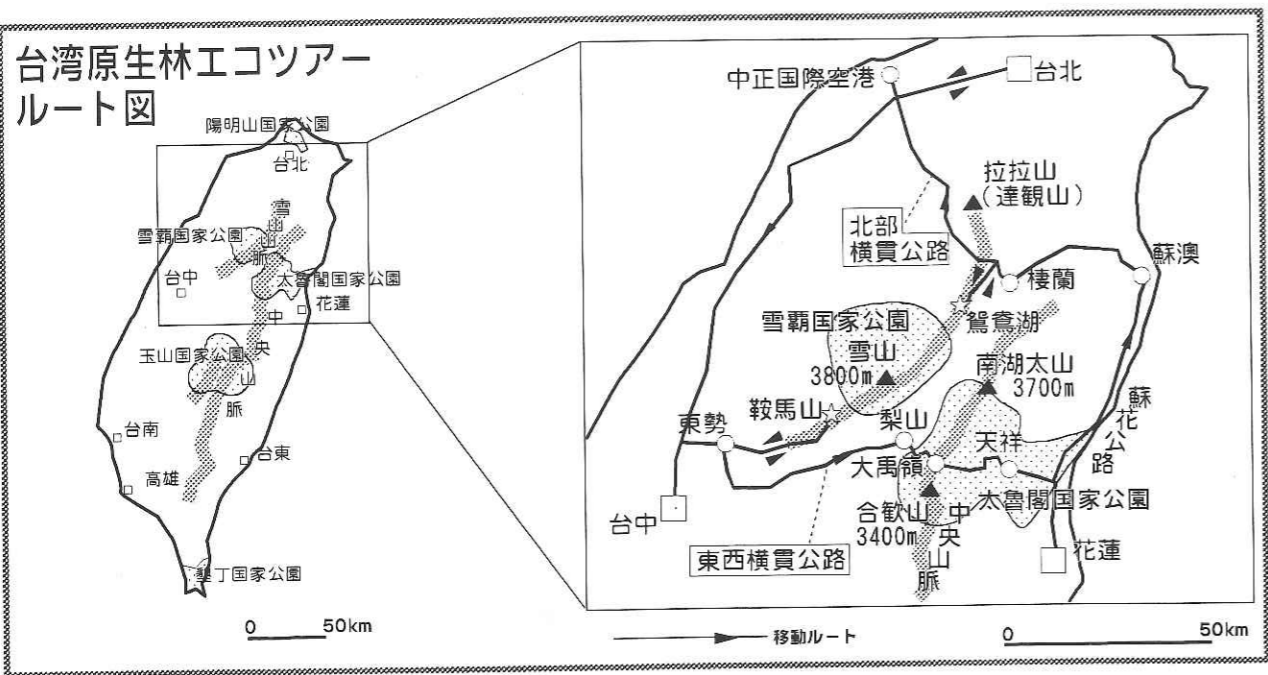
東勢からスギの植林地（なんと日本のスギクリプトメリア・ヤボニカ）の中の舗装された林道を登ること1時間、標高一四〇〇m付近で車を止めると、あたりはすでに深々とした照葉樹林に変わっている。楽しそうに張くん（彼にはすでに「博士くん」というあだ名がついていた）にうながされ、踏み込んだ森は衝撃だった。直径一・五m、高さ三〇mと

いった堂々たるサイズのシイやマテバシイ（日本と少し種が違う）が立ち並び、日本にはこんなものはない。立派な森だ。これが台湾の森なのだ、と感動的に納得。でも林床にブッシュが少なく歩きやすいし、日本と同じマシヨウが多い。ヤクスギサイズのシイの倒木を、ヒロハヒノキコケ（たぶん）が覆っているところなど、まったく屋久島と同質の雰囲気だ。あたりには、ツチトリモチの赤坊主ものぞいている。なんだかとてもなく優秀な親戚に巡り会ってしまったように、複雑な気分におちいつた。



鞍馬山の紅檜の森

車に戻って林道を進み、ひらけたところからあたりを眺める。斜面に沿って、見渡す限り鬱蒼とした照葉樹林が広がっている様子は、屋久島のあの西部の森をもつても、これまたまったく木刀打ちできそうにないのだった。我々があんまり驚いているので、博士くんと趙くんは「あれ？」という顔である。ちよつと立ち寄っただけですよ、という感



じで、次に鞍馬山の本地地向かう。尾根にはツガが混じり始める。途中、大雪山森林遊楽区入り口の門をくぐるが、建物のたたずまとい、周囲の山火事注意ののぼりやポスターとい、日本の営林署の雰囲気にとっくりで笑ってしまう。日本占領時代の名残だろうか？

標高二〇〇〇m

付近にいろいろな施設が集まっている。ここで車を止め、遊歩道に入るとまたびつくりであった。荘厳なヒノキ（紅檜と台湾ヒノキ）にヤマグルマが混じり、マテバシイの巨木もみられる。典型的な温帯針葉樹林の様相で、ヤクスギランドにそっくりではないか。大きなギャップがあると思つたら、台風でひっくりかえつ

たツガだった。コースには「③この鉄棒で懸垂をしましょう」などといった看板が設置されており、「森林浴の効果」フイトンチットとは「の」のような解説はわずかにあるものの、自然解説がほとんどないのが残念である。

三〇〇〇メートルの垂直分布

東西横貫公路

東勢で遅い昼食を取った後、険路で名高い東西横貫公路に入る。始めは普通の二車線をゆく。学校のような建物の前で止まり、対岸の植生はとみると、何となくしょうもない松と落葉広葉樹ののだが、博士くんは「これは極相林ではないけど、原生林です」と言う。斜面の地質がぼろぼろの堆積岩で、不安定な岩場にこのような自然植生が成立するらしい。

このあたりから対岸はみるみる高くなり、険しさを増してくる。同時にこつち岸も険しくなりだし、道はしだいに斜面を追い上げられ、上へ上へと逃れてゆく。大甲溪の大峡谷の始まりだ。趙くんはこの果てしなく続く白谷林道のような道を、対向車をもとせずにガンガンとばす。そろそろ日も暮れて、谷の中は今一つ展望が良くないのだが、とんでもないところにいるのがよくわかる。一車線をやけに平気で飛ばすなと思つたら、下り車線はいつの間にか分離して、はるか下を走っている。斜面があまりにも急峻で二車線の幅を取れないのだ。完全に夜になると間もなく、傾斜は緩み、梨山（標高二〇〇〇メートル）の街へとはいった。

翌日、梨山からしばらくは、急斜面の果樹園が続く。梨山は大陸から連れてこられた退役軍人が、送り込まれ造り上げた果樹の名産地である。まず中央山脈を越える大馬嶺（標高二六〇〇メートル）にでて、合歡山（標高三〇〇〇メートル）へゆく。ここは山荘があったり屋台がでいていたり、まあ観光ポイント、といった感じ。

山稜部は、玉山箭竹（ヤダケ。属は違うがヤクザサモヤダケの仲間）のサツ原にモミ（タイワントドマツ）という和名だが、トドマツはマツではなくモミの仲間（がバッチリに森となり、屋久島や四国の山の植生

台湾の原生林と巨木



鷲鷹湖付近の紅檜巨木

「シャーン！」みんなで検討の結果、南湖太山の主峰だということになる。双眼鏡で見ると雪をかぶっている。その右下に尖って見えるのが中央尖山。よく晴れて気持ちがいい。

森の優先種は紅檜と台檜だが、所々に植林してある樹はすべて価値の高い紅檜だという。針葉樹の同定を教わりながら行く。希少な台湾スギ

ギ(タイウニア)や鬱大杉(ウニンガミア)が沢山にあらわれる。タイウニアの幼木は、ほとんど日本のスギ(クリプトメリア)スギのことにシダーと言いついては適当でない。そっくり。葉ががっしりして、下向きにつくのでわかる。謝老師の説明は常に正確で納得できる。

タイウニアの巨木がそびえる。ほとんどヤクスギか、それ以上の立派さだ。ヒノキ類も大きく豊かに繁り、ちよつとほかと比べようのない美林が延々と続く。である。霧中で森を眺め、写真を撮りながら行く。屋久島の淀川林道から原生林を見る感じと似てなくもないが、森が果てしなく続いていくところが、圧倒的に違う。

その向こうにちよんとして現れたピークは名峰、大霸尖山だ。中央尖山とあわせて、台湾三尖中、二尖を見ましたね、と廖さん。この人も台中博物館の楊さんも、じつにタフで発声がいいのは、兵

役で鍛えられたせいだろうか。「卒業したら、軍隊にいかなきやらないんですよ」と博士くんが憂鬱そうにこぼしていた。台湾では徴兵制が敷かれており、二〇才を過ぎた男子は二年間兵隊にとられるのだ。大学に在籍の間は猶予期間になる。弁当を食べて、そろそろ戻りましょう、ということになる。再び楽しい森歩きで車へ。今度は廖さんの運転で台北へとばす。

帰路にとつた北部横貫公路は、最高点こそ二〇〇〇メートルを越える程度だが、沿線の照葉樹林もなかなか深い。沿線の明池には山荘があり、こもゆつくり見てみたいところだ。

台湾の原生林エコツアアの試みは、謝老師のお力添えをいただいて素晴らしい成果をあげることができた。日本の自然がどのように外へつながっているのを見るために、北日本にはカムチャツカやウスリーがあり、西日本には台湾がある、ということを確認できたと思う。しかし見るべき森は限りなくあるらしい。台湾の底知れぬ魅力をちらりと覗き見た旅だった。

屋久島を訪れた人から「人跡未踏の地に立つ縄文杉より大きな木」の可能性について尋ねられることがある。しかし巨木が存在するという言い伝えに基づいて縄文杉が再発見された、という点を考えれば、屋久島にそのような余地は無さそう。

いってみれば、藩や国やらに強いられ、大勢の人が四〇〇年もの間、木材を捜し続けた森が屋久島なのだ。目立つ木があれば見つかっていた。縄文杉のように飛びぬけて美しいものなら言い伝えも残るだろう。(第二位の木が屋久町にあるが、それにしては現在二位とされている翁杉より少し大きい程度である。二〇〇〇年の開発の歴史を持つ西日本にあって、質量ともに最大最後の森なのは確かだが、そこに口マンや何かを求められても無理というものだ。

ところが、台湾では文字どおり手付かすの原生林が広く残されており、巨木が未だに発見され続けている。

観光ポイントとしても有名な阿里山の神木は、胸囲二十三メートルという巨大な紅檜(サワラ)に近縁。台湾では一級材で、ながらく台湾最大とされてきたが、今年苗栗大安溪上流で発見された紅檜の巨木が、胸囲じつに二十五メートルを記録し、一位の座に輝いた。阿里山神木は枯死したという理由でランキングからははずされた。実は以前から枯れていたのだが、後継者がおらず引退させられなかったらしい。また、やはり今年になって樓蘭の近くで発見された司馬庫斯神木と、阿里山近くの林道脇で発見された巨木とが、それぞれ三位

と五位にランクインしたという。この底知れなさはいっただうしたことだろう。

また北部横貫公路の途中にある拉拉山(達観山)は、巨木の多さで知られており、ここには神木二〇本を訪ねながら歩く歩道がある。この第十八神木は、周囲十八メートルの紅檜で、写真でみる限り、とても大きい大きさである。

かつて日本人から高砂族と総称された台湾高地先住民の文化と檜の関係がどのようだったのか、縄文杉のようにこれら巨木たちの伝説が彼らの中に残っていたのか、非常に興味あるところだ。しかしこの国には、古来森林開発を行う力を持った権力や技術文明は存在しなかった。大規模な伐採が始まったのは、一八九五年の日本の植民地化以来だ。つまり開発の歴史がほんの数十年前と浅いため、未だに未知のエリアが残された。

台湾では現在、檜の伐採は中止されている。

。(現在「台湾ヒノキ」といわれているのは、どうもベトナムから台湾経由で来ている物が多いらしい。)地質が脆く、傾斜のきつい山地で伐採を進めた結果、下流で洪水が頻発した。経済的に力を蓄えた今、無理をして伐採をする必要はない、という考えらしい。木材として使っているのは、ほとんど人工林である(主に日本の杉。台湾では柳杉と呼ばれる)。見識というものである。

片や日本は、法隆寺や薬師寺など、日本文化の大看板の維持を、国の存在すら承認出来ずにいる台湾からのヒノキ材に頼ってきたが、情けなくもその道すら閉ざされたわけだ。

まったく自国の文化を守るため、よそから資源をかき集めた、などという話は、どこかの滅びた古代文明そっくりで、やはり恐ろしい。国内に、使用に耐えるヒノキ材はまだ蓄積されていない。



台湾十傑と屋久杉著名木の大きさ比べ

※台湾十傑は、知人の巨木ライター蟹江さんに頂いた台湾の新聞記事のデータによる「胸圍」、屋久杉は屋久杉自然館「屋久杉巨樹・著名木」のデータによる「胸高周囲」。縄文杉でも台湾では七位以下である。

台湾十大神木(十傑)リスト

樹種	名称	胸圍 (m)	所在地	備考
紅檜	大雪山の神木	25.0	苗栗県大安溪第75林班	鞍馬山入口から入り大雪山北面230林道
紅檜	眠月の神木	20.5	阿里山 眠月、大溪第89林班	
紅檜	司馬庫斯神木	19.7	桃園県達観山(拉拉山)	樓蘭、鷲鷹湖付近
紅檜	達観山18号神木	18.8	南投県新中横公路89キロ口付近	落雷で頭頂部欠、空洞になる
紅檜	新中横公路の神木	17.9	苗栗県觀霧、唐穂山大溪第61,62林班	阿里山-玉山の間、森の中で立派、壁のよう
紅檜	觀霧唐穂山の神木	17.4	雪霸国家公園内	
紅檜	觀霧檜山巨木	17.2	苗栗県觀霧	
檜	阿里山の檜	16.2	阿里山第222林班	この木のみクスノキ
紅檜	達観山21号神木	14.0	桃園県達観山(拉拉山)	
紅檜	達観山12号神木	13.6	桃園県達観山(拉拉山)	

○は、1997年に新しく発見された木

台湾の森を往く

旅行主催:風の旅行社
運輸大臣登録旅行業第1382号

- 開講日時: 9年12月27日(土)~10年1月2日(金) 6泊7日
- 会場: 台湾(羽田空港国際線ターミナル 集合・解散)
- 参加費: 218,000円(国際線往復航空代金・現地移動費・7泊16食代含む)
○お申込時に予約金3万円、残金は11月25日までにお支払下さい。
○講師、現地日本語ガイド、当社担当者が同行。
- 定員: 20人(最少催行10人)
- 講師: 屋久島野外活動総合センター・小原比呂志

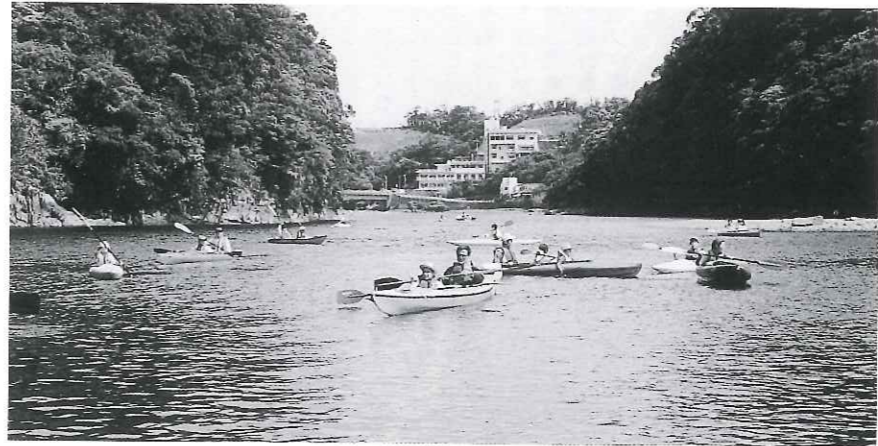
臺灣地處亞熱帶 島上高山聳立
雨量豐富 孕育了熱帶至寒帶多種森林

台湾 エコツア-開催のお知らせ

- 12/27 羽田→台北。一路、樓蘭森林遊楽区へ。
- 12/28 ○ヒノキの神木と会う(樓蘭森林遊楽区)
樹齡千年以上のヒノキの大木、約80本が鎮座。
太古の森の雰囲気をごすもスフォレスト。
○ダイナミックな海岸断崖を貫く蘇花公路を、花連へ。
- 12/29 ○照葉樹林の大渓谷(太魯閣国家公園・新白楊步道)
中央山嶺の東面、台湾の地史の壮大さを見事に語る
大理石の壮大な渓谷には、サファイア色の激流が流れる。
その断崖にのこる広大な照葉樹林の道を歩く
- 12/31 ○台湾の森の垂直分布(太魯閣~合観山頂上付近。車で移動)
○亜寒帯の森を観察(合観山頂上付近)
1/1 台中へ移動。フリータイム。
1/2 台中→台北(車)・台北→羽田。

*どなたでも無理なく歩けるコースです。

安房川カヌー体験会



5月26日、昨年に引き続きY.N.A.C主催の「カヌー体験会」を開催した。これは、屋久島の人にカヌーや安房川の自然に親しんでいただくことを企画したものである。募集人員をはるかに上回る応募があり、やむを得ずお断りした分も多かった。中には、去年参加できなかったのが、今年の会を楽しみにして新聞折り込みが入るのを今日か今日か

日かと待っていたと話してくださいました。当日は素晴らしいカヌー日和となり、午前と午後、全部で44名の方が、春の穏やかな日差しの中でカヌーを楽しんだ。たくさん感動とお礼の言葉をいただいたが、その中からお願いした一湊の寺田桃花さんの感想文をここに紹介したい。(松本)

安房川をカヌーで探検

湊小学校五年 寺田 桃花

「ドクン。ドクン。」

私の心ぞうがなっている。

私は今、安房川の下流にいる。目的は「カヌー」に乗るためだ。

何日前かに、お父さんがちらしを見て、「桃花、今度の日曜日、安房川でカヌーに乗るのに参加しないか。」と私に言った。私は、ただおもしろそうだったので「うん。いいよ。」とあっさり答えた。

それが、当日「こんなにきんちようするとは思っていません。最初に乗り方とおり方、注意を聞いた。それから自分たちが乗るカヌーを決めた。私は最初お父さんと乗るつもりだった。だけど「もう5年生だから」ということで1人で載

ることになった。カヌーには1つ1つに名前がついてるらしい。私は「ゆう子ちゃん」という。

いよいよ出発だ。乗った人は橋の下で待っているように言われた。私はくるくる回りながら橋の下まで行った。橋のすぐ先にはきれいな砂浜があった。そこでカヌーを交代することになった。1人乗りに乗りたいという人がいたので私はお父さんと二人乗りに乗ることになった。2人乗りは、1人乗りのように回らなくまっすぐ進んだからとても楽しかった。また少し行つてから休けいになった。

市川さんが「お茶やジュースがありません。どうぞ飲んで下さい。」と言ったので、私はフアントを2杯ももらった。ジュースを飲んで自己紹介がすんでから休けいになった。私は泳ごうと思つて川につかたけれど水が冷たくとても泳げなかった。

30分ぐらい休けいして、もう少し上流に行くことになった。上流の方には山に木がぎっしりつまつて、とてもきれいだった。岩のすき間からわき水も流れている。そこからへんでUターンして帰ることになった。帰るときも2人乗りだったので1番についた。カヌーからおりた時、

うでがとてもしたかった。帰りの車の中でお父さんが「9月にもあるときは、菜々海もいっしょに参加しようか。」と言った。妹は「うんいいよ。」と答えた。

私は、カヌーに乗ったのは初めてだったけど、いろんな人から「上手だね」と言われてとてもうれしかった。今日は、天気よかったから最高の日曜日となった。



今年出版された屋久島本から

「癒しの森」

一ひかりのあめふるしま 屋久島

田口ランディ・ダイヤモンド社

自然と仲良くなりたかったランディはどろしたか。屋久島・自然への足入れ入門本。Y.N.A.Cも案内者やら狂言回しやらとして至るところに登場するのでおかし。読みやすく面白いおすすめ本。

ところでこの本はエッセイとは何かという問いかけに対する一つの答えにもなっている。エッセイリズムの推進に関わる人が、全員一読すべき事例ともいえるだろう。(もちろん購入して下さいね。)

ガイドの仕事は一期一会、原則としてその一日が勝負である。我々はすべてのお客様さんに対して、屋久島の自然体験がその人の人生にどう関わって行くのか関心を持っていくが、もちろん追跡調査をするわけにもいかない。そういう思いに元氣よく答えてくれたのがこの本である。そう、こうなってもらえるのが一番嬉しいのだ。

この本、タイトルがタイトルだから、書店ではヒーリング系の書棚に置かれていることがある。探すときはご注意ください。

「屋久島の海」 屋比久壮実写真集
八重岳書房 1,905円

クサビライシが本当に「ささく」している。回着生活の中らしきものも写っている。写真などを見ると、松本エッセイをより楽しむためにも、この本は欠かせないという気がする。ただこの本、どうも編集者の意思が突出しているような印象をうけるのだが、ネイチャーフォト集として編集されたために、屋久島の本としての価値が若干薄くなってしまうのが少々惜しい。

「屋久島」世界遺産の自然 青山潤三
平凡社 3,800円

科学朝日の連載をまとめたビジュアルな本。生物地理学的な切口が新鮮で、多くの興味深い事実が美しい写真をつかっけて提示される。とくに昆虫に関わる話が面白い。屋久島の自然の全体像をつかむための本ではないように感じるが、著者の関心のありようがストリートに表現されていて共感できる。おもしろい。

「屋久島ウミガメの足あと」大牟田一美
海洋工学研究所 2,000円

「屋久島の不思議な物語」松田高明・秀作社
出版 1,500円

前号の『屋久島本の世界』で紹介した「屋久島物語」に続き、屋久島生まれの著者による本が2冊。これらの本はどれも妙に密度が濃く、私などには抵抗し難い面白さがある。西を一日歩いたその夜に「不思議な物語」を読んだ私は、ほとんどトリップしてしまつた。「ウミガメ物語」はウミガメ研究会の大牟田氏の何と自伝。ついで口が滑った「点がどうかで、島内の書店には置かれていない。読みたい方は大牟田さんまで連絡を。」

「森林美」石橋睦美 平凡社

北海道から屋久島までの森をほぼ網羅した美しい写真集、大変な労作である。富士山や伊豆、足摺岬など、残された森の重たい存在感。屋久島の森で何かを感じたあなたなら、この本の価値をひとめで理解することが出来るだろう。著者は今後南西諸島へ向かうという。期待したい。

屋久島ウミガメ研究会、朝日新聞「海への貢献賞」を受賞

屋久島ウミガメ研究会(大牟田一美代表)は、長年にわたるウミガメの保護と調査研究の実績を高く評価され、朝日新聞海への貢献賞を受賞しました。おめでとう! 副賞はなんと200万円。この賞を元に長年の夢であったウミガメ博物館(仮称)の建設計画も動き出すとのことです。今後もさらなる活躍を期待します。

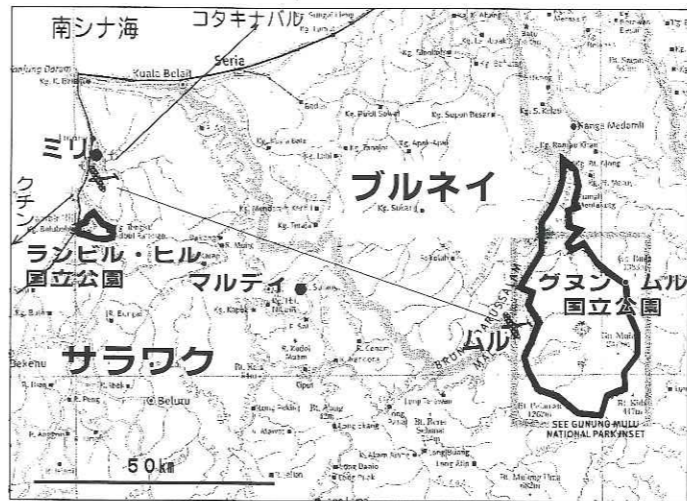
1997年サラワク研究記

1997年2月20日～2月28日に松本・市川で東マレーシアボルネオ島のサラワク州へ行ってきました。

昨年引き続きのサラワクツアーですが、昨年はロングボートの沈没で、十分な成果が上げられなかったため、今年はその雪崩戦でもありません。

クワラルンプールの夜

2月20日に屋久島を出発し福岡泊。夜松本と二人で中州の街をさ迷うも、数多の客引きを冷やかすだけで成果なし。



2月21日、福岡空港からマレーシアの首都クワラルンプール(以下KL)へ。では昨年のタマンネカラ研修の際、お世話になったKL在住の楠本君に案内してもらい、夜の町へと繰り出した。光客の来ない夜の町を「この町で、まずは中華街で夕食。ビルスナービルを飲みながら、普通の日本人は、こんなところへは来ないが、最近では、地球の歩き方」を持った若いのが時々うろついている。話をしていた矢先に、まさに巨大なザックを抱いた地球の歩き方男が現れ、爆笑する。

その後インド人バブで、ビールを飲みつつ、生演奏を聞く。

マレーシアはマレー系、中華系、インド系等の複合民族国家なのだが、モスリムのマレー系は麦向き酒を飲まないの

で、飲むならば中華系がインド系の店に行かなければならない。そこでインド人バブとあ

った訳であるが、インド人バブに行く日本人観光客はほとんどいないらしい。

概してマレーシアの飲み屋では、つまみは出てこない。インド人バブでも、つまみなしでただひたすらビールを飲み続ける。

演奏は、キーボードとパーカッション(太鼓)で奏でるインドの映画音楽というところであったが、歌

っているのが、客なのか、シンガーなのかよくわからない。手書きのカラオケの歌詞カードのようなものを、ペラペラめくって曲を選ぶと、奏者は楽譜無しで何でも弾いてしまう。

へき日本人である。森を導いておきながら、たかがカメ一匹に、何かいえるのだろうか。そのうえイバン族は、かつてはヘッドハンティングで知られた部族でもある。

とはいえ、ジャングルでは声はすれども獣の姿を見ることが難しい。僕にとっては、そのウイリアムおぼちゃん曰く、大変珍しい(カメに出会えた)ことは、大きな喜びだった。また、食うのならともかく、ベットの用意を知らずとも納得できない。そこで、次に来たときにもう一度そのカメに出会いたいから(僕の英語力では、その程度のことしか言えなかった)。と、逃がしてやらうことにした。

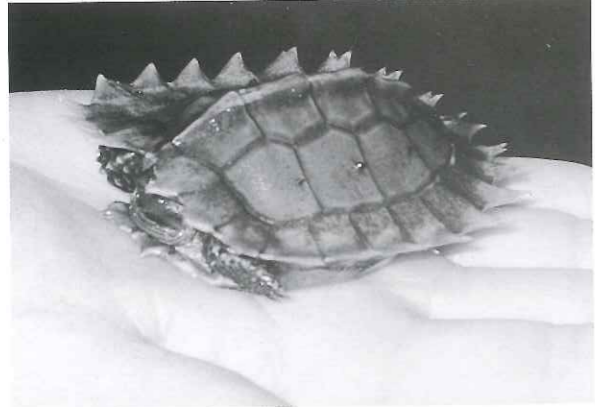
ウイリアムおぼちゃんは、逃がしたって次に来た人が持つて帰るとかブツブツ言っていたが、じぶしがカメを開放してくれた。イバンの人たちがこのベットの意味合いを知る由もないが、ウイリアムおぼちゃんがパートタイムとはいえエコツアラーで糧を得ようとするのであれば、やはりカメは逃がさすべきである。

熱帯雨林は金で買える(ブルネイ王国を飛ばす) 2月23日、いよいよ今回の目的地であるムルへ飛んだ。双発の小型機は、操縦している様子を目の前で見る事ができる。空港を離陸し、プランテーションや伐採地の続くサラワクの森を飛ぶと、突然眼下に広大な森が広がる。ブルネイ上空にさしかかったのだ。

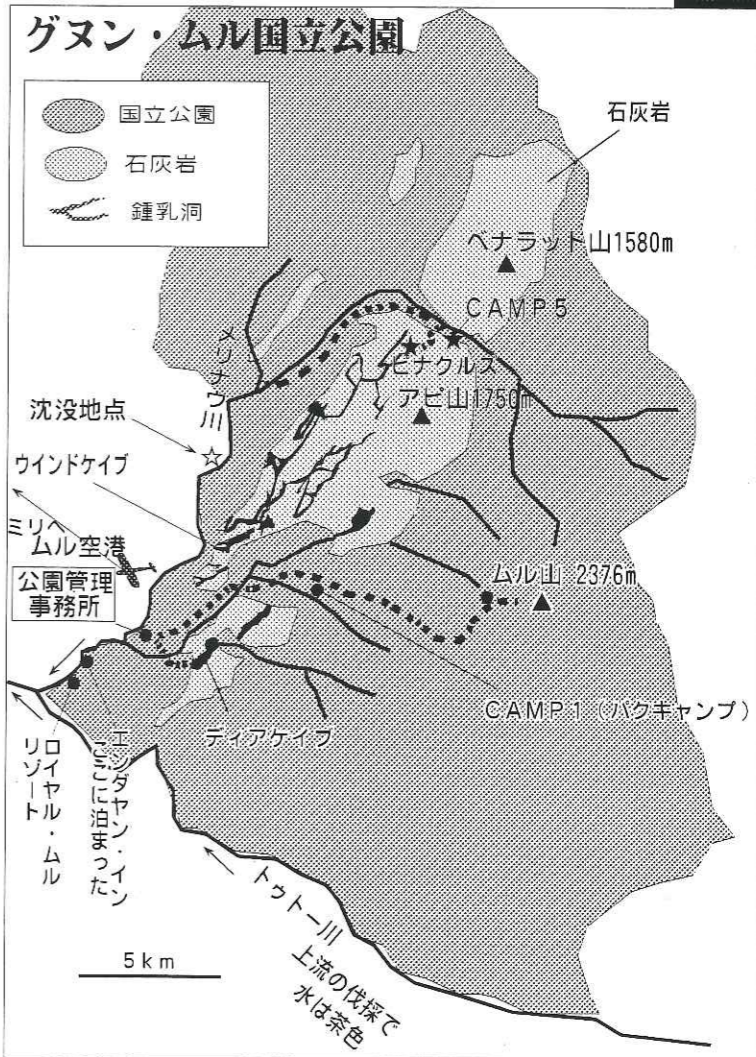
この森がとてつもなく素晴らしい。まだ登録の話は聞かないが、これぞ世界遺産という感じで、見渡す限り鬱蒼たる熱帯雨林が、延々と広がっている。

また熱帯の川という赤茶けた水のイメージが強いが、ブルネイの川は、周りのジャングルを映して黒々と澄み切っている。伐採だらけのサラワク州の川が茶色く濁っているのと対照的だ。

是非行ってみたいと思う。ムルでのガイドのウイノ君に聞いたところ、この森は観光客には特に開



ランビルの亀



インド人は、慎重なせいせいか、決してステージにかぶりつこうとはせず、皆、最後部の席に座っている。太鼓の音にリズムを取るでもなく、身じるきもせず静かに歌に聞き惚れながら、ビールを飲むのが、彼らの流儀のようである。なんとも不思議なKLの夜だった。

カメとイバン族のおぼちゃん(ランビル国立公園) 2月22日、いよいよKLからボルネオ島のミリへ入る。

ミリではボルネオアドベンチャーのパートタイムガイドのウイリアムおぼちゃんが出迎えてくれ

放されてはいないらしく、訪れる術はないというところであった。石油に浮かぶ世界で最もリッチな国の一つであるブルネイでは、自分のところの森を切るよりも、サラワクあたりから木材を買った方が安いのもいらない。当然、観光による外貨獲得など必要なく、ただただ広大な熱帯雨林が手付かずに残されているというの、なんと素晴らしいことである。自然保護と経済問題などというのを痛感させられるポイントである。

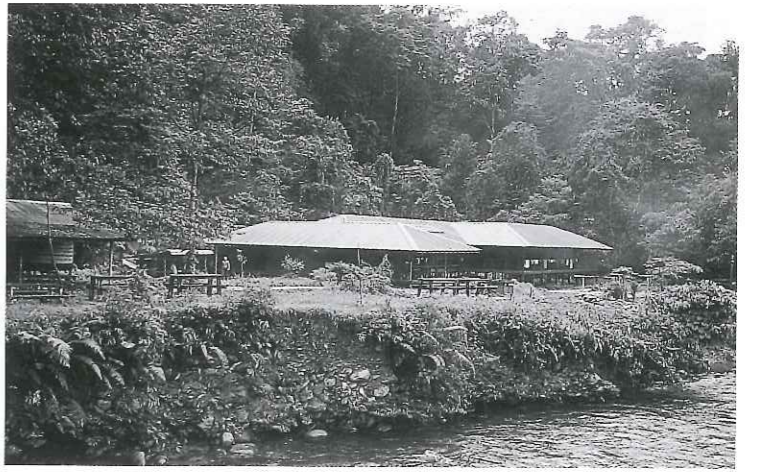
NO FISHING (CAMP 5) ムルでは、ボルネオアドベンチャーの正ガイドのウイノ君が出迎えてくれた。また昨年



ブルネイの森

のガイドだったウイノさんも空港に来ており、松本と昨年の沈没話で旧交を温めあった。ムルではウイノさんがオーナーを務めるエンタヤンインが宿舎である。この時僕のザックの釣竿を見たウイノさんが「CAMPSネ、FISHING」 「GOOD」 といって親指を立ててくれた。こちらのガイドは、日本人に英語を話さずともかませか語尾にネをつける癖がある。それはともかく、CAMPSでの釣りに、いやが上にも期待が高まった。

今回の大きな目的の一つは、昨年ロングボートがひっくり返って到達できなかったピナクルズへ登ることである。 昼食後、ロングボートに乗ってピナクルズへのアタックキャンプとなるCAMPS(メリナウキャンプ)へ向けて、出発した。昨年の沈没ポイントもなんとかなりアタック、1時間20分ほどのクルージングで上陸ポイントに着く。ムルでは、基本的に川が道となっている。ロングボートでの移動は、風を受けて心地よいものだ。但し、上陸ポイントまでは



CAMP 5

褐色の水で、水底は全く見えない。川を知り尽くしてなければ、とても走れるものではない。

ここからは、川沿いの平坦なジャングルを7、8kmの歩きた。前年の一番開花の影響が、フタバガキや下リランなどの大量の実生が林床を埋めていた。どいっしょに歩くと、かかへいち早く上へ伸びることが命綱とばかりに、またたきとひよひよと蔓植物のようになじりあがっている。途中野生のシイチヤバカリヤという白茶茶葉すっぱいトロピカルフルーツを食したりしながら、約3時間でCAMP 5に到着した。

ここより上流は、全てナシヨナルパークとなり、伐採の影響を受けていない。メリナウ川は完全に透明となる。見るといっしょの魚がうようよと泳いでいるではないか。いっしょ釣らんと思ひ、早速用意をして川へ向かった。いっしょ、いきなり腕に刺青を

タイバン族の強面のガイドが、飛び出してきて「NO FISHING!」と叫んで竿を奪おうとする。なんでもここでは絶対に釣をしてはいけないらしく、違反すると2年以下の懲役または10000RM?以下の罰金だぞうた。確かにここはナシヨナルパークの中である。うかつといえはうかつであった。

それにしてもウイノ君のあの言葉は、いったい何だったんだろうか?ウイノ君だって僕が釣竿を持っているのを知っていたのに止めなかつたではないか。しょうがないので竿をたんでCAMP 5のまわりを散歩していたら、上流の木陰で水中眼鏡をつけた男が、潜って魚をとっているように見える。いったいどうなっているのだろうか?

ウイノ君の話によると、ここはブロン族の土地だという。だからブロンは魚を捕ってもしることになってる。また本来はこの森の住人ではないが、狩猟採集民のブロン族も魚を捕る事が許されている。しかしバン族を含めその他の部族のものは捕ってはいけないとのことであった。ウイノ君もウイノさんもブロン族である。釣に対するニュアンスの違いは、うも部族の違いからきているようであった。ちなみに、エンダヤンンに戻ったら、早速ウイノさんから「CAMP 5ネ、FISHINGネ、GOOD」と聞かれた。

写真とウイノのピナクルズ

CAMP 5(標高70mくらい)は、最近新築された高床の東屋風の小屋で、百人くらいは収容できそうであった。もともととは、岩壁の底の下の岩屋から始まっているCAMP 5も、20人収容程度の古い東屋を経て、今ではソーラシステムで電気が使え、シャワーもある、思いのほか快適な小屋となっている。壁がないので風通しもよい。

2月24日、いよいよ2年越しのピナクルズアタック

である。

ピナクルズとは、アピ山(1750m)中腹に突き出た無数の石灰岩の尖塔のことである。数十メートルの高さの地獄の針山といったところだ。

7時40分出発。今日も雨だ。川沿いの道を少し戻ってから、石灰岩の山体に取り付く。これがまたとんでもない急登である。およそ2、4kmの距離で1100m高度を上げる。平均斜度30度といったところか。モッチョム岳の急斜面を一気に1000mよじ登るようなものである。連日の雨で、石灰岩はぬるぬると滑って歩きにくい。その上時々岩角が鋭利な刃物のように尖っているのが油断できない。「アテツクスの雨具を持ってしても、汗であつというまにぐしょぐしょになってしまった。

CAMP 5までのルートが、沢沿いの湿ったジャングルで、あまり大きな木がなかったのに比べ、山へ取り付くと落ち着いた雰囲気森となり、梢をリスが走り去るのが見えたり。所々に石灰岩地帯に特有の草花が咲いている。

標高1000mあたりまで登ってくると、あたりが急に蒼むしてきて、小原が喜びそうなモスフォレストとなる。苔に覆われた木に、着生ランが無数についている。杉にみくにした木もあり白雲水映を思い出す。また1000mを越えると、ホルネオらしきツボカズラが目につきはじめる。ブルーベリーがなつてい



ピナクルズ

たので、つまみ食いをするが、ウイノ君は危ないといつて食べなかつた。彼らはジャングルの住人であつて、山の住人ではないようだ。道はますます険しくなつて、フィールドアスレチックのようになってくる。

まもなくウイノ君がここだという。10時45分、あたりはガスに包まれて何もみえない。とりあえず昼食のサンドウィッチを頬張っていると、ホルネオやマジリス(直訳)が、弁当のおこほれを預かりにちよさちよと出てくる。先に来ていたドイツ人がバ

ン切れをちぎって投げていたが、屋久島人としては餌をやるわけにはいかない。

そのころ、風とともにガスが切れてきて、目の前にピナクルズが広がった。ここはすうとピナクルズを眺める展望所のようなところだ。山腹の樹木の緑から突き出る白い石灰岩のピナクルズは、天を刺す剣のようでもあり、ノコギリの刃のようでもある。展望所の最前部の石灰岩の岩の上がると、ピナクルズを眼下に見下ろすことができるが、この岩自体が垂直に切り立っており、ピナクルの頂上に立っているような気である。屋久島の天柱石などもそうであるが、自然の造形とはすさまじいものである。

ピナクルズといえは、いろいろなガイドブックに写真入りで紹介されているが、良くくきえてみると驚くような写真はありであった。どうもここが唯一無二のピナクルズ展望ポイントのようで、写真は「この景色そのままであった。本日は天柱石を巡るようには、ピナクルズの間を迷うことを期待していたのであるが、谷の向こうを眺めているのは、容易には近づけそうもない。これだけ苦労して来たことを考えると、やはり間近に眺め、見上げ、直接触れてみたかったというのが正直な感想である。下りは2時間で駆け下った。

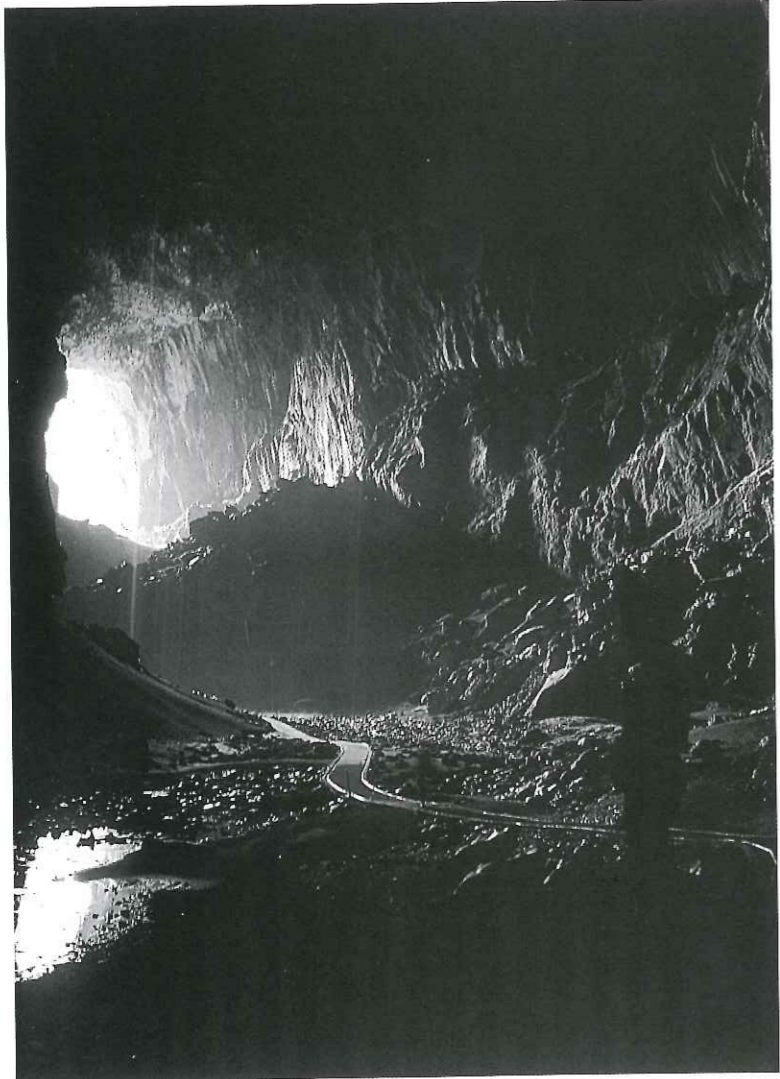
ムルでの登山には、もう一つムル山(Mul Mountain)へのルートがある。こちらは片道3日ほどかかるので、もう少し気合を入れたいと覚悟を。ウイノ君の話によると、ムル山への最初の宿泊地となるCAMP 1(バクキヤン)までの道のりが、フタバガキの良好な熱帯雨林に覆われていておもしろいところである。CAMP 1の裏には滝もあつて気持ちいいところだ。

生きている洞窟(ムル洞窟) 翌2月26日と28日は、CAMP 5から戻り、ムルのせせうびとつに見所である洞窟巡りを楽しんだ。今回のサワフウの修めへへへである。

ムルで一般に開放されている洞窟は、現在4ヶ所。いずれも歩道の整備が進んでおり、歩きやすい鍾乳石の美しいウインドケイブやともなないスタイルのディアケイブなど、個性的な洞窟群は世界でも有数のシステムである。

洞窟というと死の世界という印象があつたが、実は洞窟そのものにも、生き死にがある。大きな流れは、石灰岩を削り、新たな洞窟を作り続ける。同時に、染み出す水は、鍾乳石を削り、神秘的な造形で洞を埋めていく。一方、水脈が変化し、枯れてしまった洞は、死んだ洞窟であり、その輝きは失われる。一連のムル洞窟が、クリアウオーターシステムと呼ばれるのは、水系と石灰洞との密接な関係を示すものである。

またディアケイブ等の巨大洞窟は、数十万羽ものコウモリのねぐらとなっている。このコウモリは、夜になると外で虫を食へてくる。ディアケイブでは60万羽ものコウモリが、一晩に1羽10gづつ虫を食へるといわれている。そうすると一晩でなんと6トンの虫を食へて来る計算となる。それが洞窟の中で糞をするものだから、その量たるやすさまじいものであり、その糞を餌にする夥しい数の有象無象が、洞窟の中にひしめくことになる。更にはそれらの糞食者たちを捕食するクモやサソリなどがおり、ホンソメウケヘラの卵にコウモリをクリーニングするハサミムシまで住んでいた。まさにコウモリシステムと呼ぶにふさわしい生態系が洞窟の中に出来上がっているの



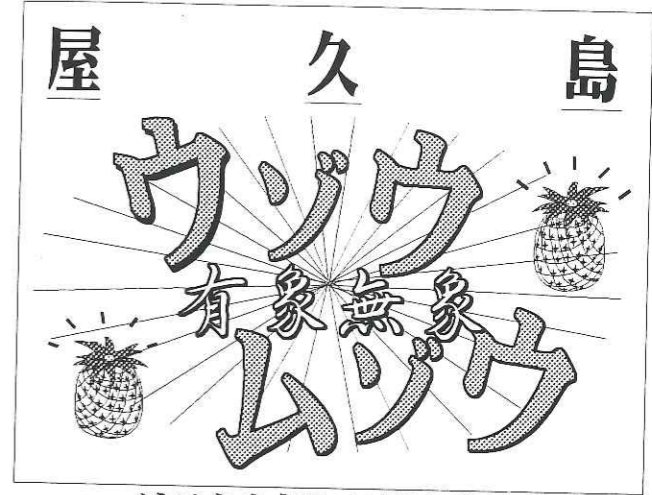
ディアケイブ

である。

ところで、暗闇の中でヘッドランプに集まってくる羽虫がいるのに驚いた。光が集まるくらいならば、なぜ外へ出て行かないのであろうか?水と石灰岩で作られた神秘の世界は、美しさと謎に満ちた世界であった。

さてコウモリシステムの主役たちは、夕方になると一斉に外へと飛び立つ。洞窟の入り口付近で、雲が湧くかのように渦を巻いて立ち登り、やがて竜のように天を翔けて流れていくらしい。このコウモリたちの飛行を見るのが、ムルでの楽しみの一つなのであるが、残念ながら今回は見ることが出来なかつた。今回のムルは、最初から最後まで、徹底して雨だった。人間は雨の日でも観光するが、コウモリは、雨の日には飛ばないそうである。

というところで、今度こそ期待を込めて、1998年2月21日から2月28日まで有隣堂のホルネオツアーで、今年はサワフウへ参ります。何もかもが驚きに満ちた、熱帯の森や洞窟を一緒に楽しみましょう。(市川)



はるかも加わり第6弾!

草片石(クサビライシ)

「草片石」と書いて「クサビライシ」と読める人がどれくらいいるだろう。これがはまた海にいる生物、サンゴの仲間だとして、人と言えどもだ。こんな名前をつけた海洋生物学者がいたことに驚いてしまう。「草片」とは、古語でキノコ類の総称として使われていた。これが又この「クサビライシ」の生息に何ともびびったりの名前だけにすばらしい。

を「群体固着型サンゴ」に対して、「単体自由形サンゴ」と呼んでいる。大きさはちよつとあんぱんかメロンパンぐらいの大きさ。そんなのが海底にごろごろ転がっているのだ。転がっているのあまり波の強い外洋にはいない。元浦や津森などの入り江になったところにいる。ひっくり返るとこの石ころのようなものが自分で元に戻るというが、どうも私は信じ難いのだが。

このクサビライシは、他のサンゴと違っていつも自由気ままに生きていられるかと言うとそうではなく、幼生期を終えると他のサンゴ同様、ほんの一時だけ固着生活を送る。この時期のクサビライシを見つけたとき、この「草片石」の名前になるほどと感心してしまつたのである。まさしく、キノコそっくりなのだ。

クサビライシの分布域は奄美大島以南となつており、もしかしたら屋久島が分布の北限となるかもしれない。その割には、あるところにはゴロゴロ転がっているのには驚く。また、クサビライシの仲間には、ちゃんと調べたわけではないが、見た感じでクサビライシ、マルクサビライシ、イシナマコ、キウウリイシと何種類があるようである。

屋久島の海に潜ってクサビライシを見つけたら、是非固着生活を送っているクサビライシを見つけていただきたい。(松本)



液状化

このところ鹿児島県内で地震が頻発しています。このおかげでゴールデンウィークの屋久島への観光客の入り込み者数も減ったとか? しかし屋久島は、巨大な花崗岩の岩盤の上に乗っているから大丈夫です。この間一度も揺れを感じませんでした。

ところがこの屋久島も過去には、阪神大震災以上の大地震に見舞われていたようです。時は、今から約300年前。屋久島の北北西約30kmの海底に潜む鬼界カルデラが大爆発をおこしました。噴き上げた噴煙は上空数kmに達し火山灰は、東北地方まで降り積もりました。この火山灰は特徴的なオレンジ色をしていることからアカホヤと呼ばれ、縄文時代の地層の年代を知る鍵となっています。

一方、鬼界カルデラ周辺では、一旦噴き上げた噴煙が崩れ落ち、高温の軽石や火山灰が火砕流となって海面を走り、鹿児島県本土南部からトカラ列島北部まで火砕流堆積物で埋め尽くされました。南九州の先進的な縄文文化は、この火砕流とともに消滅し、文化の中心は東北へと移行したとも言われています。

この火砕流は幸屋火砕流と呼ばれており、屋久島でも宮之浦岳山頂部から海岸線にいたるまで、いたるところに堆積していることから、屋久島全土をこの火砕流が吹き抜けたと考えられています。



流動化して、噴き上げる現象で、川の堤防や埋め立て地などで、砂が噴き上げるのが見られていました。かつては、液状化で砂が噴き上げることはないと言われていたらしいのですが、あの阪神大震災の時に、砂が噴き上がったことから、この楠川の礫の配列も液状化と認められたようです。つまりこの液状化の跡は少なくとも阪神大震災クラスの地震が屋久島を襲ったということの証拠となっているわけですね。この礫は下の礫層から噴き上げて来て、幸屋火砕流の層の下で止まっています。

鬼界カルデラの大噴火の際に、まず阪神大震災クラスの大地震が屋久島を揺るがし、直後に火砕流が屋久島を襲ったと考えられるのです。

ところでこの液状化の跡を見ながら、「そういえば、我家は地震保険に入っていない」などと考へていると、案内して下さった鹿児島県立博物館の成尾先生は、「次に鬼界カルデラが大噴火すれば、鹿児島は全滅ですよ」とおっしゃるので、なぜか妙に安心してしましました。

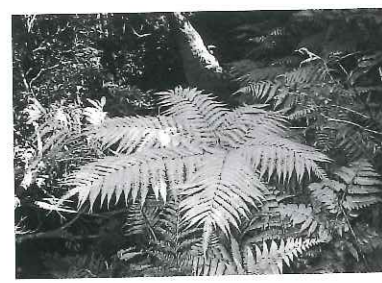
ちなみに鬼界カルデラが大爆発をして火砕流が屋久島を襲っているのは、確実なところでは9500年前と3000年前の2回です。あと数万年、孫子の代は大丈夫でしょう。」とは、成尾先生のお言葉です。(市川)

ナチシダ

「おっーなんだこのシダは?」初めてナチシダの存在に気がついたときの動きを、いまだに覚えている。シダにしては異形というべき、柄が地面から一メートル程もすい、と立ち上がり、そのてっぺんに普通のシダ葉が五枚つくという、ちよつと秋田プキのようなプロポーション。大きな割にしっかりと感のあるシダである。

それまで現に見えていたのにさつぱり脳が認識しなかった植物が、関心がわいてきて植物眼が肥え出すと、次々に新種のような鮮烈な目に飛び込んでくるようになる、という時期だった。心ときめかせて図鑑をめくると、当然しつかり載っているのがっかりして、それでも名前をつきとめたのだから上々だ、と大きくレヘルを下げて満足したのだった。

ナチシダという種名は、熊野の那智滝にちなむ。熱帯性のシダで、フィジーや東南アジアから、屋久島、熊野をへて伊豆の天城山の南麓まで黒潮沿いに分布しているらしい。屋久島ではだいたい標高三〇〇メートルから九〇〇メートルあたりに生育する。



このナチシダが現在、異常に増えている。ちよつと四年前、一九九三年の台風十三号は、しばらくは立ち直れない程に屋久島の森を打ちのめしていったが、そのときに木が倒れたり枝が折れたりして大量に光の入る空間(ギャップ)ができた。シダやコケは孢子で飛び回るから足が早い。ギャップのうち、暖かく湿ったところを選んで、生長に光を必要とするナチシダが大躍進したらしい。至るところに群落が生じているのだ。

伐採などで斜面が崩れたりすると、森が復活する前にウラボシなどの陽性シダがぎっしり群落を作ることがある。ただウラボシはたまり水に極端に弱いという弱点がある。そこで谷沿いを担当するのが湿潤派陽性シダであるナチシダ、という事になるのだ。あのフキのようなスタイルの葉は、叩きつける雨を受け止めて土壌の浸食を防ぐ力が強いはずである。

崩壊地などに生育するある種の苔類やナチシダなどのシダ類には、その場をとりあえず安定させ、かつ水分を保つ、という性質があるように思われる。屋久島のような風化花崗岩土壌の上で壊れた森が蘇るためには、この仕事が必要だ。そこで私はこういつた植物を「森の癒し植物」と呼ぼうと思うのだが、少しアブナイだろうか?

ところで平地ではいまセンダングサ類とチミザサがナチシダ以上に猛烈に分布を拡げている。二種とも動物に種をくっつけて運ばせる「ひつつき虫」植物で、うっかりその茂みに踏み込もうものなら、ズボンにくっついた種(ちくちく痛!)むしりにかかりの時間と労力を費やさねばならない。このしつこい伝播力が台風ギャップの光を得て、猛威をふるい始めたらしい。気持ちの良いお気に入り

ヤマカガシの毒

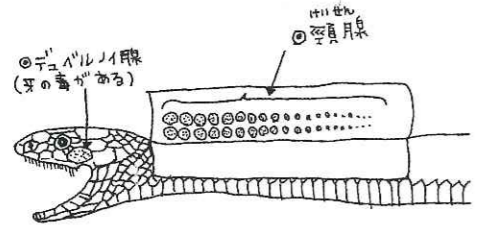
その日のお昼ご飯はおにぎりだった。ゆかりとおとなのふりかけをペロリと食べた。おいしかった。そしていつものように、人指し指と親指のさきっぽについた居残りご飯粒を食べようと口に指を突っ込んだ。その瞬間、「ゲ、ゲンゲロゲ、」。こみあげる嘔吐感。舌や口回りは、歯医者さんで麻酔を打たれてうがいをした時口の端から水がビュ、というほど痺れている。しかも口中に広がる二ガワリめずさ。なぜ? ナゼナノ? オマイ、フィンガー? 必死でその日一日の指の人生について考える。

この日は学校の仲間と爬虫類の生態調査に来ていた。そして午前中何匹かのヘビを素手で捕獲していた。ジムグリ、シマヘビ、ヤマカガシ、。 「あー、」。思わず叫んでしまった。ヤマカガシといえは、首筋に毒があるが我々がヘビ師匠千石正一先生に習ったではないか。なにに私は、。宿に戻ってすぐ手を洗った。

ヘビは自分の身を守る為にいくつもの防御手段を持つ。ヘビは毒付く毒ハ怖いと連想して、ヘビを嫌う人が多いようだが、ヘビはだつたらと噛むわけではない。たいいていのヘビは人と対面すると逃げる。逃げたり、隠れたりするのは第一の防御手段だ。シマヘビが首をS字状に持ち上げて鎌首をもたげるのも攻撃のポーズであると同時に

に、防御のポーズでもある。「来るなよ」と威嚇しているのだ。猫が毛を逆立てるのと同じ。そして、そこまでしても行ってくれない敵に使う最終兵器が、ママシヤヤマカガシの持つ毒である。この毒は捕食用、防御両方の意味を持つ。ヤマカガシの場合その毒が2箇所に潜んでいる。これじゃ敵もびっくり手が出せない。「防御の毒」だ。今回私がアツサリやられた毒は頸腺と呼ばれる特種器官から分泌される。図のように皮膚の下に2列に並び、開口部はなく表皮の下に埋もれている。しかし私のようにこの部分をおもいっきり掴むと、乳白色の分泌液が滲んでくる。この毒はヒキガエルの耳腺から出るガマ毒と同じステロイド系で、目に入ると一時的に失明することもある。目を擦らなくてよかった。

追伸: 普通はこういう経験をすれば、ヘビを捕まえるのをやめるだろうからこいつらの作戦もまあまあだ。しかし残念。おいらは東京に戻って一番にヘビ用の皮手袋を購入した。ヘビよ、急いで私から逃げなさい。(河東田)



CALENDAR

- 1/18 松本 屋久町PTA 海のスライド講演会
- 1/18 小原 有隣堂説明会
- 1/31~2/2 松本 「『自然が先生』全国市民の集い」でバナーを勤める
- 2/12 市川 小瀬田小PTA家庭教育学級で屋久島の講演
- 2/15 松本 安房小学校 スライド映写会
- 2/20~2/28 松本・市川 サラワク研修
- 3/1~3/3 市川 久住環境教育ミーティングにゲスト出演
- 2/24~3/8 小原 有隣堂ポルネオツアー講師
- 3/20~23 NEOS屋久島ネイチャーツアー（受け入れ）

- 4/27 河東田晴香 入社
- 5/25 YNAC主催の「カヌーに親しむ集い」安房川にて開催
- 6/30~7/6 市川 知床水鳥営集地・ヒグマセンサスに参加。シークヤックで知床半島一周（ヒグマ6頭目撃）
- 7/17~21 DOダイビングクラブ屋久島エコツアー（受け入れ）
- 7~9月 前田央輝、YNAC研修生

- 10 松本・小原、東洋工学専門学院 屋久島実習で講師
- 10/12 松本、NHKBS生中継「屋久島」に出演
- 10/16~17 松本、阿蘇で行われたJONミーティングに参加
- 11/9 小原、久方振りに霧島へゆき、YNACの視点で森を楽しむ
- 12 松本、観光地作り実践講座「屋久島におけるエコツーリズムの現状」（仮題）を執筆中
- 12/1~5 松本、ITDSの研修で八丈島へ
- 12/12 小原、筑波大の特別講義「屋久島人と自然、自然環境の解説」で「屋久島のエコツーリズム」を担当

編集後記

*6・7号合併号となりました。原稿を書いて頂いた方やYNAC通信の発行を楽しみにして頂いた方、大変申し訳ありませんでした。YNAC通信はやはり半年毎に定期的に発行していきたいと思えます。これからもご声援宜しくお願い致します。〔松〕

*発行遅延の責任をとって、頭を丸めるのがいだろうと社内で勧められた。幼い頃から「お前はスキンヘッドが似合うに違いない」といわれ続けてきた私はその気になりかけたのだが、種々の理由から残念ながら見合わせた。すみません！罰として今年は4回以上縄文杉まで登ります。〔小〕

*前号から早や1年がたっしまいました。果たしてリニューアルできたかと振り返ると、髪を伸ばしたくらいで、人間そう簡単には更新できないということを再確認したけだつたりして。今年はもう一度原点に立ちかえって・・・本年もよろしくお願致します。〔市〕

Y-NAC文獻目録1997.1~1997.10.

執筆記事

★生命の島

「情けは魚のためならず」①ウバウオ 40号pp26~27 ②オニヒトデ 41号pp22~23 ③サンゴの表側 42号pp17~19 ④サンゴの裏側 43号pp19~21 松本毅

淳子夫人による問答無用の題目「情けは魚のためならず」4編。石の下のウバウオをのぞいたり、オニヒトデの肩をボンと叩いたりしたくなったのは私だけではないだろう。③はいつになく文章が堅く、読後に寂寥感が漂うのはなぜか。

★企業と人材 NO.680 97.5.5.産労総合研究所 P63

大智開眼-51「緑萌える屋久島へゆこう」小原比呂志

総務部人事課の閲覧書架に並ぶ雑誌。今のご時世ですから若い人には本格的な自然体験をさせておかないとまずいですよ。屋久島で企業研修はいかがですか、というようなことを上品に書こうとしたのですが…。

取材記事 今期は広告誌にぜひぶん登場させて頂いた。

★ザ・ゴールド 97.5 株式会社JCB pp30~36 「原始の森の夢を求めて屋久島を歩いた」松山猛 文 高田 象 写真

JCBカード会員誌。格調高い文章と、シックな写真で綴られた、大人向けのしづい一編。巨木が積まれた貯木場や紀元杉の写真がなかなか凄い。またヒロハヒノキゴケがメディアに登場したのは史上初ではないだろうか。

★E&A 97.5. No.75 pp4~7 西部ガスリビング

「森と川と海と！自然の宝島・屋久島」

西部ガスの広告誌。ほのぼのと楽しそうに屋久島の雰囲気伝わってくるのはライターのお人柄か。だが、屋久島の次の記事に照屋林助、登川誠仁という沖縄民謡界の両巨頭が登場しているのには驚いた。林助さんと並んでしまったぞ。

★アルスール 97.夏号 日本信販株式会社 pp20~27

「屋久島の内懐に住む」

こちらは日本信販の会員誌。新INAKA暮らし、なるYNACスタッフの紹介記事。トロオキ湾シークヤックなど水系の写真が美しいが、ボロな社屋がいつそうボロに写っているのが困った。市川のクマヒゲ全盛期の風貌を記録する貴重な資料。

★環文研vol.46 97.9.30 (財)環境文化研究所 pp18~21

「自然の鼓動が聞こえる森と水の島」小倉千枝

島の環境というテーマの一環として、屋久島エコツアーが紹介された。隣の記事に「楽しさ、美しさ、おいしさ」の「三さ」が観光のモットーたるべし、という一節があり、考えさせられる。楽しい観光ということこそ、実は奥深く難しいことなのかもしれない。

★Uターン・ターナー・ターナー・ターナー1997冬号 リクルート P32

「地方へ行って自然を守れ！屋久島野外活動総合センター」

小原が出ています。これを読んで就職希望が殺到したらどうしよう、と心配していたが、杞憂だったようである。でもうちのお客様から「見ましたよ」と、いう反響がけっこうたくさんあるのはなぜ？（小原）

from Y-NAC

★97.11~98.3の日程

12/27~1/2 小原、有隣堂エコツアー「台湾の森を往く」講師

2/21~28 市川 有隣堂エコツアー「熱帯雨林ポルネオを往く

：サラワク編」講師

3/1 市川、横浜市の有隣堂営業本部ビルで屋久島の講座説明会

★YNACのホームページ開設

インターネットにYnacのホームページを開設しました。ツアー紹介をはじめとして、屋久島の今をお届けする「今が旬」、我々が見つけた「屋久島の謎」、Ynacの最新動向をお知らせする「スタッフルーム」のコーナー等々、ビジュアルな映像でYnacを紹介しています。

12/8現在アクセス数7000人突破。

URL: <http://village.infoweb.ne.jp/~ynac/>



Y-NAC通信 6,7合併号

ワイナックつうしん

発行日 1998年1月1日

発行 (有)屋久島野外活動総合センター

住所 〒891-42鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦2446

Tel/Fax 09974-2-0944

E-mail: ynac@mc.infoweb.ne.jp